

インターンシップで経験したこと

今週は2年生全員がインターンシップに出かけ、それぞれの進路や学科の学習内容をもとに研修先を決定し、生物生産科は農家、農園など19の農業関係事業所、環境土木科は建設土木業・造園業など16事業所、総合学科は生徒一人一人の興味・関心、進路希望に応じて病院・保育所・食品会社・市役所など職種は多岐にわたり、42の事業所でインターンシップを行いました。ご協力いただきました77の事業所の皆様に感謝申し上げます。10月10日からの4日間でしたので、あっという間だったと思いますが、学校では体験できないことを経験する貴重な機会です。

インターンシップの目的は、働くこと、生きることの尊さを実感させ、勤労観・職業観を醸成すること、進路選択への積極性を醸成するなど、高校で行うキャリア教育におけるインターンシップの効果は大きいものがあります。それぞれの職場でプロフェッショナルな大人の姿勢を目の当たりにすることは、自己の生き方を振り返る大きなきっかけとなるし、生産性、正確さ、創造性、服務規律、社風などさまざまな場面で学校とは異なった社会に対する責任を感じ取ることで、仕事に対するやりがいや充実感が生まれてくるものです。

総合学科2年生がインターンシップに出かける前に、私は生徒に対し話す機会を与えられたので、このような話をしました。

『雑用とはコピーをしたり、お茶を入れたり、掃除をしたり、整理整頓をしたり…誰でもできる簡単な業務をいうのでしょうか、絶対に誰かがやらなければならないものです。本校の生徒がインターンシップに出かけて、いきなりその職場で専門的な業務を任せられることはまずないと思います。多くが雑用と呼ばれる仕事を任せられるのではないかと思います。そのときに、雑用を雑にやれば雑な仕事になります。仕事に対する姿勢でその人が信頼できるかどうか判断されるものです。誰でもできるけど、誰かがやらなければならない雑用という仕事に対して、きちんと取り組む人は信頼され、他の仕事もきちんとできるものです。雑用を馬鹿にせず、当たり前にするような姿勢が、“一隅を照らす”人で、自分の役割を一生懸命果たそうとする人が光となるものです。これからの4日間で仕事のスキルを学ぶとともに、そこで働く人の仕事に対する思いも学んでください。』

4日間の体験を終え、この体験が自分自身にとってどのような意味を持つのかについて、生徒一人一人が改めて考える機会を今後の取組として行っていきます。体験した仕事、職場の人との会話、体験を通して自分自身の適性や将来に向けての可能性や不安、悩みなどを様々な角度から見つめ、体験の意味を丁寧に振り返ることが大切です。できたことできなかったこと、失敗したこと、感動したこと、嬉しかったこと…様々なことが経験です。この経験をそれぞれがこれからの生き方につなげていってほしいと願っています。

山陰開発コンサルタントでインターンシップを行っている、環境土木科の生徒2名は、10月9日本校でドローンを用いた写真撮影と、写真測量を体験しました。小型のドローンを手元のコントローラーで操作しながら、上空から撮影し、測量する手法です。本校では経験できない実習だけに、生徒も緊張しながらも楽しそうに取り組んでいました。

今年3月に卒業し、山陰開発コンサルタントに就職した卒業生も後輩の指導にあたってきていました。

『操作に慣れるまではおそろおそろレバーを動かしていたけど、コツをつかんだらうまく飛ばせるようになり、楽しくなりました。新しい測量技術に驚くとともに、こういう仕事について街づくりに貢献してみたいと思いました。』

と、生徒の感想です。

